

3. 朝鮮半島の前期・中期旧石器時代

佐久間 光 平

(1) はじめに

朝鮮半島における旧石器時代研究が本格的に開始されるのは、社会的・経済的に安定化へ向かう1960年代に入ってからであり、その研究の歴史はまだ浅い。また、近年、道路工事・ダム工事・宅地造成工事等に伴う大規模調査が行われ、資料の増加につれて研究も確実に進展を見せ始めてはいるが(任1982)、これまでに発見・調査された旧石器時代遺跡数は少なく、さらに全般に年代的位置付けの根拠が極めて弱いため基本的な編年体系の整備も立遅れており、その研究は今なお十分とは言えないのが現状である。従って、こうした状況の中で朝鮮半島の前期・中期旧石器時代を体系的に捉えることは難しく、そのためここではこれまでに前期・中期旧石器時代遺跡として報告されているものの中から主な数遺跡について取上げ、その概略を述べるに留めたいと思う。なお、1984年刊行の韓国考古学研究会による「韓國考古學地圖」には、主な旧石器時代遺跡として20遺跡が載せられ、そのうち8遺跡が、前期・中期に属するとされているが(韓國考古學研究會 1984)、所属時期等については見解の分れるものが多いようである。ここでは、図70に主要な14の旧石器時代遺跡を示し、また、参考のために表26には崔茂藏の編年案(崔 1986)を掲げておいた。



図70 朝鮮半島の主な旧石器時代遺跡
Fig. 70 Major Paleolithic sites in Korea

第四紀	旧石器時代	遺 跡	人 類 化 石
Wurm	後 期	晚 達 里	上 詩 人
		沙 器 里	晚 達 人
		ス ャ ン ゲ	勝 利 山 人
		鮎 浦 里	
		屈 浦 II	
		石 壮 里	
Riss/Würm interglacial	中 期	島 潭 里	力 浦 人
		鳴 梧 里	德 川 人
		屈 浦 I	
		全 谷 里	
Riss	前 期	黒 隅 里	
Mindel			

表26 朝鮮半島の旧石器時代編年
(崔1986、P125の表をもとに作成)

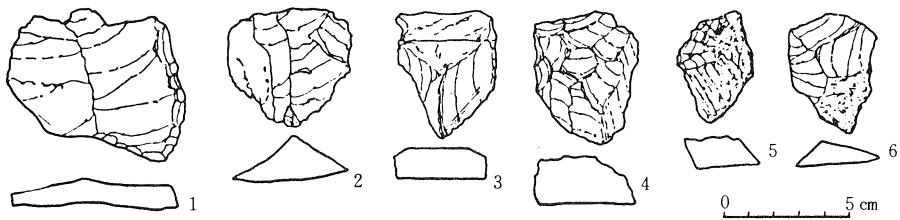
Table 26 Paleolithic chronology in Korea

(2) 主な前期・中期旧石器時代遺跡

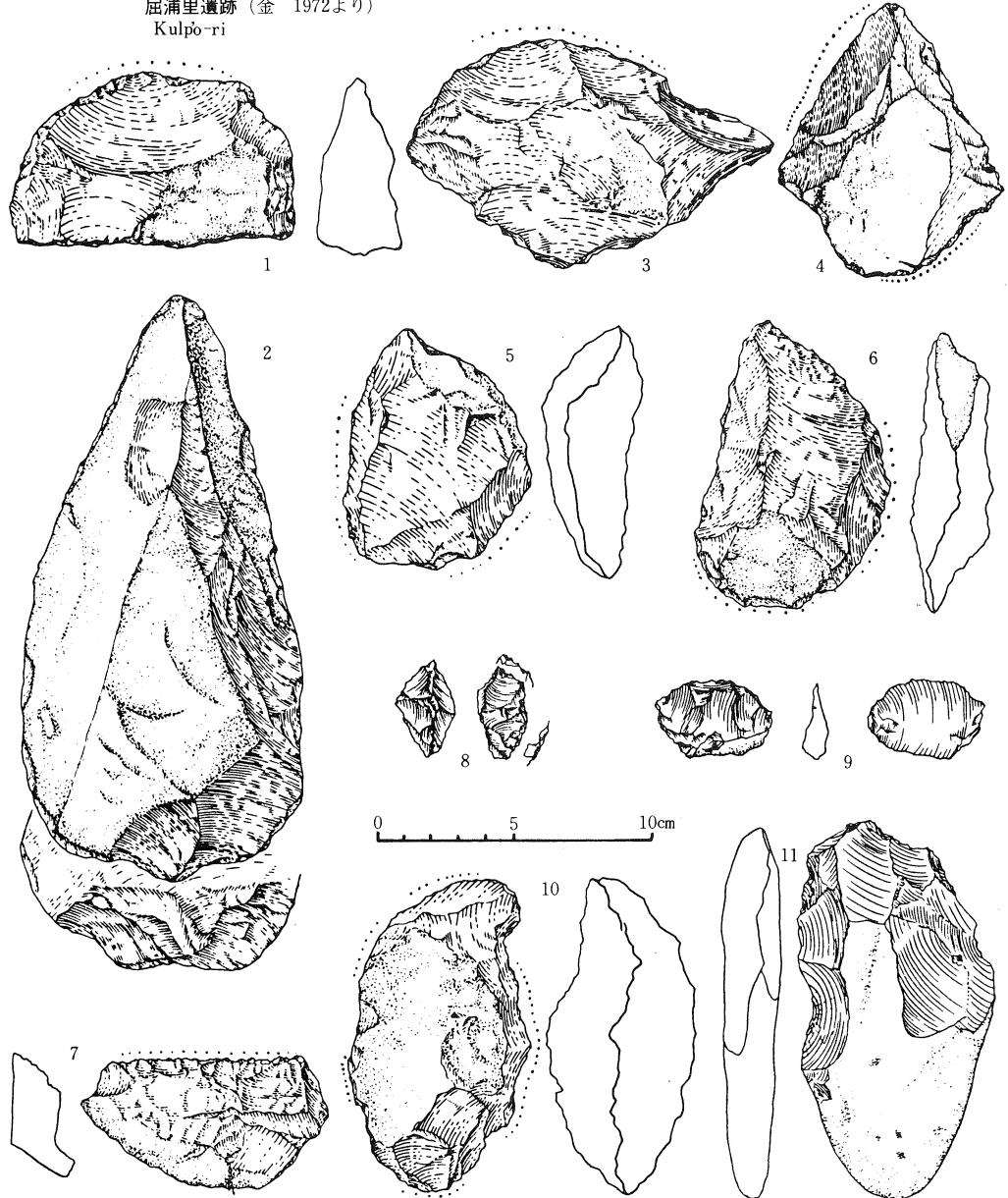
朝鮮半島の旧石器時代遺跡の存在を具体的な資料により初めて明らかにし、また、中期旧石器時代まで遡る可能性を示した屈浦里遺跡は、咸鏡北道雄基郡屈浦里の豆満江河口近くのそれ程高くない山の斜面上にある。当初貝塚として知られ、1962年には最初の発掘調査が行われたが、その際予想外にも新石器～青銅器時代の堆積層の下から旧石器時代に属すると見られる大理石製の石器が発見され、その後数次に亘る調査によって旧石器時代石器群の存在が確認された（都 1964, 都・金 1965）。しかもこの調査の段階で旧石器の包含層は2枚発見され、主として角質岩製の石器を含む上位の層と、石英岩製を主体とする下位の層が認められることが判明した。報告者により後者は屈浦文化1期、前者は屈浦文化2期と呼ばれており、このうち1期の石器群（図71）はその形態的特徴から中期旧石器時代に属すると考えられている。この石器群は主として石英岩製で、チョバー、尖頭器、石核、剝片等からなり、両面加工された石器も含むが、全般に片面加工の剝片石器が優勢であり、素材となる剝片は台石技法によって得られる場合が多いといわれる。また、分布図がないため明確でないが、これらは、住居跡を伴う石器製作跡からの出土らしく、台石やハンマーとして利用されたとみられる礫の周辺に石英岩製石器が散らばり、付近には住居の幕の裾を支えたとみられる玢岩製の礫塊が並んでいたという。

この遺跡については地質学的な所見、石器群の出土状況、石器群の技術的特徴など基本的な項目が詳らかでなく時期も不明確であるが、朝鮮半島の旧石器時代遺跡の存在が発掘調査によって初めて確認されただけでなく、中期旧石器が示唆されたことは、その後の朝鮮半島の旧石器時代研究を促進することにもなった。

朝鮮半島の代表的な旧石器時代遺跡の一つである石壯里遺跡では、前期・中期旧石器に属する文化層が実に9枚発見されたと報告されている（Shon 1978）。この遺跡は、錦河右岸、標高7～15mに位置する。1964年～1972年まで延世大学によって毎年発掘調査がなされ、これまで調査者の孫宝基によって数多くの短報・論文が発表されてはいるが、総合的な報告は今だなされていないためその全容の把握は難しい（後藤 1976）。調査は約130m程離れた第1地区と第2地区とで行われたが、前期・中期旧石器に位置付けられる石器群が出土したのは第2地区においてである。この地点は層位的に27層に細分され、12の旧石器文化層が存在するといわれる。第2地区は、下層になる程発掘面積が狭くなるため得られている石器もそれぞれ少ないが、前期とされる第1～第6文化層からは、石英岩製を主体としたチョバー、ハンド・アックス、尖頭器、クリーバー、スクレイバー、剝片等が出土し、また、中期とされる第7～第9文化層からは、前期とは異なり珪質岩などを主体的に用いたチョピング・トゥール、クリーバー、尖頭器、スクレイバー、彫器、剝片等（図71）が発見されたと報じられている。しかし、これらの資料を実見したカリフォルニア大学のJ.D.Clark博士は、下層出土資料は人工品ではないとも指摘して



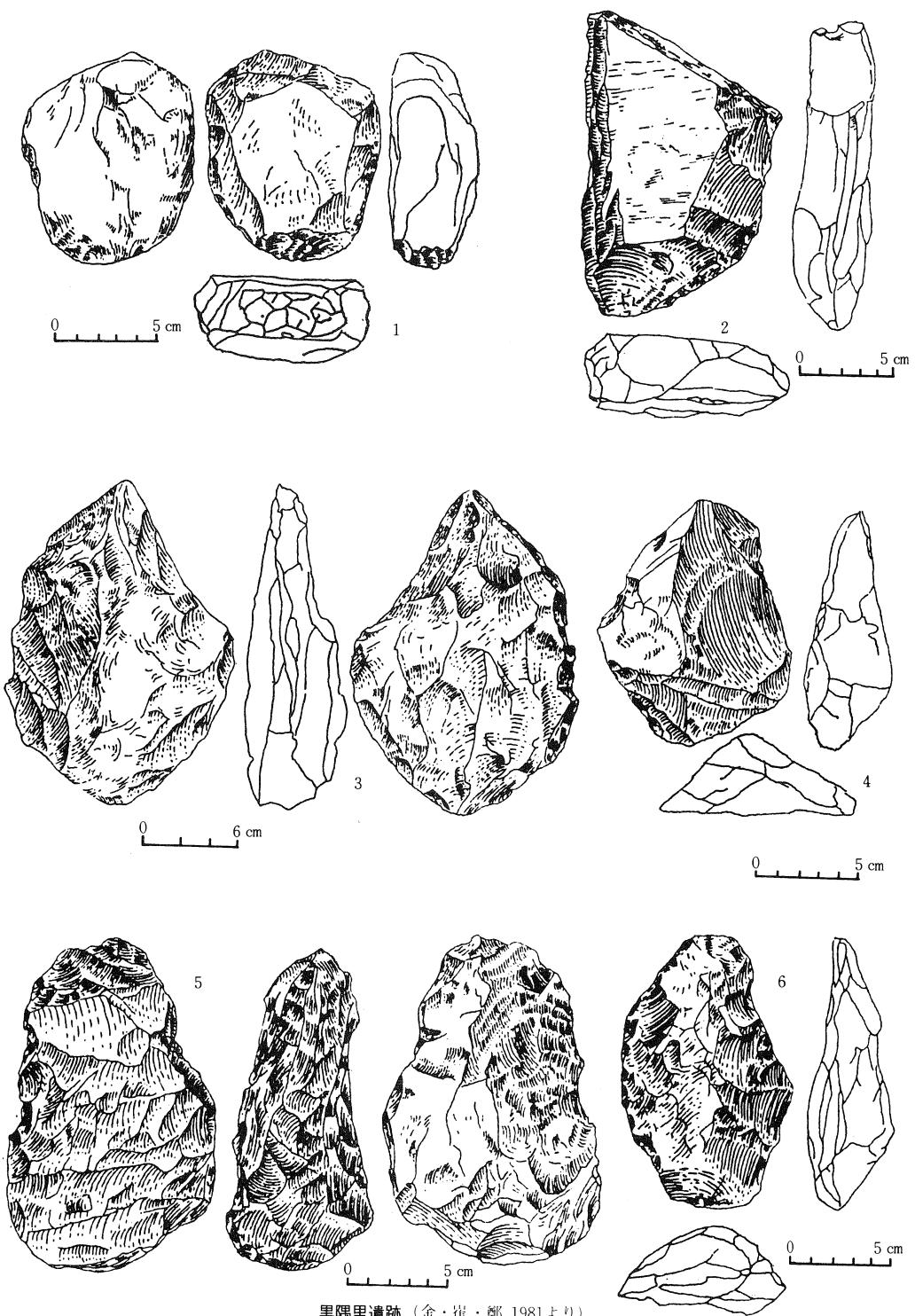
屈浦里遺跡 (金 1972より)
Kulp'o-ri



石壯里遺跡 1～7 (第1～第6文化層)
Sokchang-ri 8～11 (第7～第9文化層) (Pow-key SOHN 1978より)

図71 朝鮮半島の前期・中期旧石器 (1)

Fig. 71 Lower and Middle Paleolithic industries in Korea (1)



黒隅里遺跡 (金・崔・鄭 1981より)
Kommunmoru

図72 朝鮮半島の前期・中期旧石器 (2)
Fig. 72 Lower and Middle Paleolithic industries in Korea (2)

おり (J.D.Clark 1983)、もしその下層出土資料が第1～第6文化層出土資料を指すのであれば、石壯里遺跡出土資料の一部は石器としての認定自体に問題を抱えていることになる。

また、年代についても、孫宝基が上述の資料を前期・中期旧石器にそれぞれ属させた根拠には確実な地質学的裏付けがあるわけではなく、“石器”自体の型式学的分析から導かれた年代観であるということなので、所属時期についても調査者の主張通りそのまま受入れるわけにはいかないようである。

平壤南東の平安南道祥原郡には黒隅里遺跡という洞窟遺跡があり、1966年からの調査によって多くの動物化石と共に石灰岩や石英を利用した前期旧石器が数多く出土したといわれている(後藤 1976, Choi 1980)。出土石器には、チョバー、チョピング・トゥール、ハンド・アックス、尖頭器、剝片等(図72)があり、調査者によれば、これらは簡単な原始的方法で打ち割ったもので、その打ち割る方法には直接打法と台石打法が用いられ、このような方法で製作された石器は全般的に大きく加工が少ないという。また、石器は、もとの素材の形態にしたがって、台形・三角形・半月形等をなし、加工は片面に施し両面に施すものはないらしい。このような石器群は、石器製作技術と形態から見れば、中期旧石器時代に位置付けられる屈浦里遺跡の1期の石器群よりも一見極めて原始的であり、従って時期的にはそれに先行するものであろうと考えられている。また、共伴した動物化石には、ひぐま・洞窟熊・ハイエナ・象・犀・猿・水牛・オオツノジカなどの大形動物と各種の小動物がみられ、これらの動物相は、周口店第1地点・第13地点のそれに類似するものがあることなどから中部更新世初期の40～50万年前頃ととらえられており、石器群もその時期のものであろうと推測されている。

近年、京畿道漣川郡の全谷里遺跡において数次に亘る調査が実施され、その成果が東アジア地域のみならず世界的に大きな波紋を及ぼしたことは記憶に新しいだろう。モヴィウスの提唱したいわゆるチョバー、チョピング・トゥール文化圏内でアシューリアンタイプのハンド・アックス類が発見されたということで、世界中の注目を集めたのである(芹沢 1982, 文化財研究所 1983, Chung 1984, William・Songnail 1984他)。

この遺跡は、ソウル北方約50km、漢難江の河岸段丘上に位置しており、1978年4月、アメリカ軍人のGreg Bowentと彼の韓国人夫人が偶然石器を採集し、その資料に対してソウル大の金元龍とフランスのBordesに意見を求めたことから、その重要性が認識されることになった。直ちに金元龍らは石器採集地付近一帯の分布調査を行い、表面はいずれも1m前後の削平を受けたものの5地点を確認し、チョピング・トゥール、ハンド・アックス類を含む総計686点の石器を採集した。1979年には、ソウル大・嶺南大・建国大・慶熙大・文化財研究所等によって発掘調査団が組織され、5地点あるうち、両面加工石器、ハンド・アックス類が最も多く採集でき、保存状態が良好と判断された第2地点が選ばれて、この地点の調査が継続的に実施されること

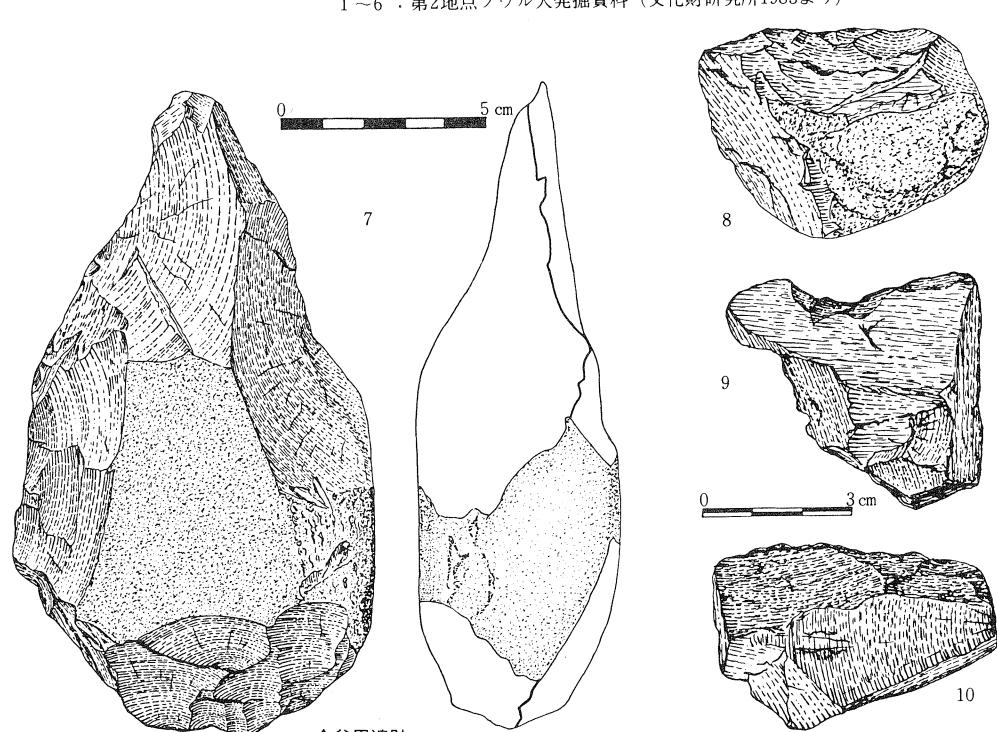
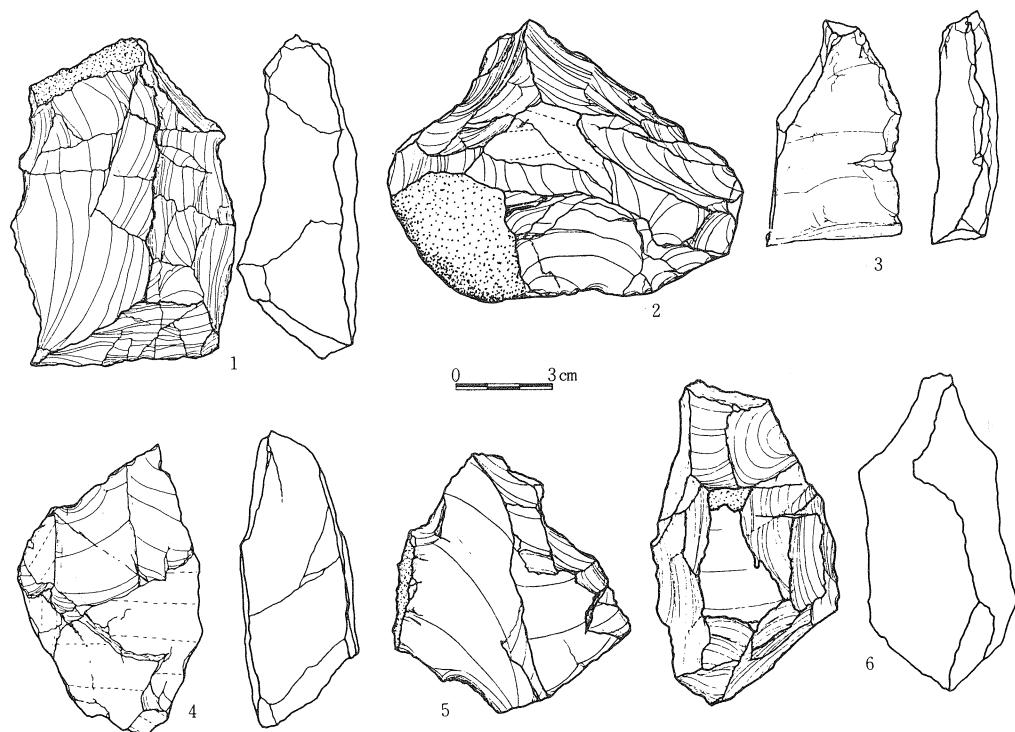


図73 朝鮮半島の前期・中期旧石器 (3)
Fig. 73 Lower and Middle Paleolithic industries in Korea (3)

7 : 第1地点表採
8~10 : 第2地点発掘資料 (鄭1984より)

になった。1983年までには6次に亘って発掘調査が行われ、各大学の調査報告と地形・地質・土壤分析や年代測定等の自然科学的検討を盛込んだ大冊が公表された（文化財研究所 1983）。

第2地点の層序は、基本的には1腐植土層、2赤褐色粘土層、3黄褐色砂質粘土層、4褐色細砂層、5褐色粗砂・角礫層、6基盤（玄武岩）となり、1979年～1980年の3次に亘る調査では2、3層の粘土層を中心に計1851点の石器が得られている（鄭 1984）。石器群は一時期のものと判断して良いのかどうか明確でないが、1次発掘調査時に現地を観察した芹沢は、文化層は2～3枚あるかもしれないとの指摘も行っている（芹沢 1982）。3次調査までの出土石器は、鄭永和によれば、石英岩製を主体として、両面加工石器5、クリーバー5、ピック7、多面体石器7、チョバー58、チョピング・トゥール27、スクレイパー191、ポイント18、ビュアリン9、剝片481、スホール681、石核22、ハンマー・ストーン22等である（鄭 1984）。これらのうち両面加工石器は型式学的にアシューリアンタイプのものであり、他の石核石器も前期旧石器的特徴を示すといわれる。また、剝片製石器は、石核石器から剝離された剝片を素材としているのではないかとも考えられている。

しかし、これらの石器群の年代は、今だ確定を見ていません。基盤の玄武岩は、K-Ar法により60万～30万（アリゾナ大）、27万（東大）と測定されているが、他の地層の年代は得られておらず、主たる石器包含層の赤褐色粘土層は、リスミンデル間氷期～リス氷期あるいはリスヴィルム間氷期と推測されているものの、その年代幅は大きい。ソウル大の金元龍は12万5千～8万年前、嶺南大学の鄭永和は約30万年前程度に位置付けられるとしている（文化財研究所 1983、鄭 1984）。現在、熱ルミネッセンス法・C-14法も試みられているが、年代については地質・地形学的分析の進展及び類似資料の増加をまって総合的に判断する必要があるようである。

このように所属時期に関しては意見が一致していないが、こうした石器群の発見によってモヴィウスの説は見直しが計られるべきであると一般に強調される場合が多く、また一方では、モヴィウスの説に基づいた石器群の理解は有効ではなく、こうした見方はそもそも不必要であるとする意見もある（Yi・G.A.Clark 1983、W.S.Ayres・S.Rhee 1984）。確かに後者の主張のように、モヴィウスのハンド・アックス文化圏・チョピングトゥール文化圏説は、資料の極めて乏しい1940年代に提唱されたものであり、本来その枠組みによって説明できる程、東アジアの実態は単純ではないだろうし、一側面を重視するあまり石器群の全容を見失うことになってもならないだろう。全谷里遺跡の場合、ハンド・アックスと呼べる石器類は表採資料が大部分で発掘品ではごく僅かであり、出土石器の中で占める割合いが断然高いのは、石核石器よりもむしろスクレイパー・剝片といった石器類であることを認識する必要がある。

いざれにせよ全谷里遺跡は、東アジア地域の前期・中期旧石器時代の研究にとって非常に重要な位置を占める遺跡であることにはかわりなく、多角的な分析・比較による石器群の究明が

内外から期待されている。

こうした遺跡の他に、提川郡チョンマル遺跡 (Yi 1982)、丹陽郡島潭里遺跡(孫1985)、鳴梧里遺跡(崔 1984) 等も前期・中期旧石器時代に属するといわれている。特に島潭里遺跡では少なくとも 8 文化層が存在し、そのうち 4 文化層が前期・中期旧石器時代に位置付けられると考えられているようである。この遺跡では、ハンド・アックス、チョパー、チョピング・トゥール、スクレイパー等の石器と共に動物化石の伴出もみられる。

これら以外にも数遺跡が引用されるが (Choi 1980, 金・崔・鄭 1981, Yi 1982, Lee 1986)、その実態は明らかではない。

(3) 今後の課題

朝鮮半島では、主に以上のような前期・中期旧石器時代遺跡があげられる。こうしてみると朝鮮半島の前期・中期旧石器時代研究は、基本的な問題点・課題が少なからず指摘されることも否定できないようである。たとえば、前述したように絶対年代および地質学的裏付けによる資料群の年代的位置付けが極めて弱いので、これまであげた遺跡は前期・中期旧石器時代遺跡として認知できるかどうかは必ずしも保障されていないし、また年代的位置付けの根拠として重視される石器の形態的比較にしても余りに一面的過ぎる傾向にある。さらに、資料群の平面分布的な分析、石器群の技術的分析、あるいは地質・地形学を含めた自然科学的分析などの基礎的作業が十分ではないため、遺跡の実態が明確であるとは言い難い。地形・地質学的研究、古環境復元、石器群の編年の確立など、直面する課題は多いと言える。

当然、こうした問題の解消と研究内容の向上には恐らくまだまだ時間を必要とするだろうが、しかし、朝鮮半島が今後日本の前期（中期）旧石器時代研究にとってますます重要な地域になることは言うまでもないだろう。地理的に日本に最も近接し、当時密接な関係を持っていたすることは容易に想像がつくし、また、日本と違って石器と共に動物化石を出土する遺跡が多いことは非常に魅力的である。今までのところ、朝鮮半島の前期・中期旧石器時代遺跡と日本のそれとの関連を指摘することは極めて困難ではあるが、日本でも該期資料が増加している時だけに朝鮮半島の研究の進展には今後とも注目していかなければならない。

芹沢長介先生、香港中文大学鄧聰氏には、文献に関してお世話になり、また東北大学農学部留学生黄敬淑さんにはハングル語文献の一部を日本語に訳していただいた。記して深謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 文化財研究所 1983 『全谷里遺蹟發掘調査報告書』 (韓国)
- 2) Choi-Mou-Chang 1980 「The Palaeolithic Age in Korea」『Journal of Academic Affairs』24-1 p.p.29-46 (韓国)
- 3) Choi-Mou-Chang 1982 「Report of the Third Excavation in Cheon-kok Palaeolithic Site」『人文科學論叢』14 p.p. 207-239 (韓国)
- 4) Choi-Mou-Chang 1984 「Excavation Report on the Myung-0-ri Palaeolithic Site」『忠州 Mahm 水没地區文化遺蹟發掘調査綜合報告書, 考古・古墳分野 (II)』 p.p. 13-14 (韓国)
- 5) Chung-Young-Wha 1984 「Acheulean Handaxe Culture of Chongoku-ni in Korea」『The Evolution of the East Asian Environment Volume II』 p.p. 895-914 (香港)
- 6) 崔茂藏 1986 『韓國의舊石器文化』 (韓国)
- 7) 鄭永和 1984 『全谷里發掘中間報告』嶺南大學校博物館學術調查報告第5冊 (韓国)
- 8) 後藤直 1976 『朝鮮半島—朝鮮旧石器時代研究の現状』『日本の旧石器文化4』 p.p. 92-180
- 9) J. D. Clark 1983 「Report on a visit to Palaeolithic Site in Korea」『全谷里遺蹟發掘調査報告書』 p.p. 594-598 (韓国)
- 10) 金元龍 (西谷正:訳) 1972 『韓国考古学概論』
- 11) ノウ 1984 『韓国考古学概説』
- 12) 金元龍・崔茂藏・鄭永和 1981 『韓國舊石器文化研究』韓國精神文化研究院研究論叢81-1 (韓国)
第3章のみ日本語訳
大竹弘之 1984 韓国全谷里遺跡(上) 旧石器考古学 28 p.p. 91-113
ノウ 1985 ノウ (下) ノウ 30 p.p. 135-154
- 13) 金廷鶴 1972 「先土器時代」『韓國の考古学』 p.p. 20-26
- 14) 韓國考古學研究會 1984 「韓國考古學報特号 I」 p.p. 10-12 (韓国)
- 15) Lee Yung-Jo 1983 「Progress Report on the Paleolithic Culture of Thurubong No.2 Cave at Chon-gwon」『Korea Journal』23-8 p.p. 22-29 (韓国)
- 16) ノウ 1982 「Paleolithic and Mesolithic Culutures in Korea; An Overview」『Korea Journal』22-3 p.p. 39-46 (韓国)
- 17) ノウ 1986 「Paleolithic Culture in Korea—especially on Turubong and Suyanggae Site」『韓國舊石器文化展』 p.p. 96-101 (韓国)
- 18) 任孝宰 1982 「韓國考古学の歩み—石器時代研究を中心として—」『古代文化』34-9 p.p. 3-15
- 19) ノウ 1986 「韓國の先史文化」『韓國美術 I, 古代美術』 p.p. 224-232
- 20) 中山清隆・沼山源喜治 1981 「朝鮮民主主義人民共和国における旧石器時代研究の成果」『考古学ジャーナル』 195 p.p. 15-20
- 21) ノウ 1982 「」 ノウ (2) 」 「」 ノウ 」 210 p.p. 54-57
- 22) ノウ 1983 「」 ノウ (3) 」 「」 ノウ 」 216 p.p. 21-25
- 23) 西谷正 1986 「隣接地域文献解題 1 朝鮮」『岩波講座 日本考古学』別巻2 p.p. 139-171

- 24) Sarah M. Nelson 1982 「Recent Progress in Korean Archaeology」『Advances in World Archaeology』1 p. p.99~149
- 25) Seonbok Yi・G. A. Clark 1983 「Observation on the Lower Palaeolithic of Northeast Asia」『Current Anthropology』24-2 p. p. 181~202
- 26) 芹沢長介 1982 「韓国の前期旧石器—とくに全谷里遺跡の発掘結果について—」『考古学ジャーナル』206 p.p. 30~35
- 27) ハウス 1986 「韓国と日本の旧石器文化」『韓国美術1, 古代美術』 p.p. 220~221
- 28) サウル大學校博物館 1984 『韓國考古學年報11, 1983年度』 (韓国)
- 29) Pow-Key SOHN 1978 「The Early Paleolithic Industries of Sokchang-ni Korea」『Early Paleolithic in South and East Asia:(Ikawa ed.)』 p. p.233~245
- 30) SOHN Pokee (ハウス) 1984 「Earlyman in Prehistoric Korea-Lower Palaeolithic to Bronze Age Culture: The Case of Kungul Case Site at Todam-ri, Maep-up, Tanyang-gun Chungchongpukto」『忠州丹水没地区文化遺蹟發掘調査綜合報告書 考古・古墳分野 (I)』 p. p.37~39 (韓国)
- 30) ハウス 1985 「1985 Excavation of Kun Cave Site」『忠州丹水没地区文化遺蹟延長發掘調査報告書』 p. p.57~58 (韓国)
- 31) 都有浩 (鄭漢德:訳) 1964 「朝鮮の旧石器文化, 届浦文化について」『考古学雑誌』50-3 p.p. 53~59
- 32) 都有浩・金勇男 (ハウス) 1965 「届浦文化に関するその後の消息について」『考古学雑誌』53-1 p.p. 47~52
- 33) 黃龍渾 (国分直一:訳) 1972 「韓半島旧石器文化の概観 (上)」『古代文化』24-12 p.p. 335~347
- 34) ハウス (ハウス) 1973 「...」『...』(下)』『...』25-1 p.p. 24~33
- 35) William, S. Ayres・Songnai, Rhee 1984 「The Acheulean in Asia?: A Review of Research on Korea Palaeolithic Culture」『Proceeding of the Prehistoric Society』50 p. p.35~48